

埼玉県内全域におけるイヌ・ネコに関する寄生虫保有状況（2018年）

動物指導センター ○ 内田 祐輔 佐々木 明日香 河原 泰伸 玉城 繁良
前野 直弘 篠宮 哲彦
衛生研究所 近 真理奈 大島 まり子 福島 浩一

1 はじめに

エキノコックス *Echinococcus multilocularis* をはじめとする動物由来感染症対策の観点から、埼玉県内（政令市、中核市は除く）におけるイヌおよびネコの寄生虫侵淫状況を調査したので、2018年の結果について報告する。

2 検査材料および方法

2018年1月から11月までの期間に当センターに収容されたイヌ32頭、ネコ19頭の直腸便を採取し、寄生虫検査を実施した。寄生虫検査は直接薄層塗抹法、ホルマリン・エーテル法（MGL法）およびシヨ糖遠心浮遊法を併用した。なお、イヌについては、所有者不明として捕獲されたものを「捕獲」、所有者が飼養を放棄したものを「放棄」とした。ネコについては、所有者不明として持ち込まれたものを「不明」、所有者が飼養を放棄したものを「放棄」とした。

3 結果

(1) イヌについて

イヌ全体（32検体）のうち、寄生虫の陽性数は5頭、陽性率は15.6%であった。なお、陽性だった5検体のうち、「捕獲」由来が4検体、「放棄」由来が1検体であった。

虫卵は、犬鞭虫卵が3検体（9.4%）、犬回虫卵が1検体（3.1%）検出された。原虫類は *Isopora ohioensis*（以下 *I. ohioensis* とする）が1検体（3.1%）検出された（表1）。イヌにおいて、複数の寄生虫類に感染していた検体はなかった。

表1 イヌにおける糞便検査結果

	オス (n=23)	メス (n=9)	合計 (n=32)
原虫類 <i>I. ohioensis</i>	1 (4.3%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)
条虫類	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
吸虫類	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
線虫類 犬回虫	1 (4.3%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)
犬鞭虫	3 (13.0%)	0 (0.0%)	3 (9.4%)
陽性頭数	5 (21.7%)	0 (0.0%)	5 (15.6%)

(2) ネコについて

ネコ全体（19検体）のうち、寄生虫の陽性数は7検体、陽性率は36.8%であった。なお、陽性だった7検体のうち、「不明」由来が3検体、「放棄」由来が4検体であった。

虫卵は、壺形吸虫卵が4検体（21.1%）、マンソン裂頭条虫卵が3検体（15.8%）、猫鉤虫卵が3検体（15.8%）、

猫回虫卵が2検体（10.5%）検出された。原虫類は *Isospora rivolta*（以下 *I. rivolta* とする）が1検体（5.3%）検出された（表2）。また、ネコにおいて、複数の寄生虫類に重複感染した検体は4検体あった。その内訳は、マンソン裂頭条虫、壺形吸虫、猫回虫、猫鉤虫の4種重複感染が1検体、マンソン裂頭条虫と壺形吸虫の2種重複感染が1検体、壺形吸虫と猫鉤虫の2種重複感染が1検体、*I. rivolta* と猫鉤虫の2種重複感染が1検体であった。

表2 ネコにおける糞便検査結果

		オス (n=10)	メス (n=9)	合計 (n=19)
原虫類	<i>I. rivolta</i>	0 (0.0%)	1 (11.1%)	1 (5.3%)
条虫類	マンソン裂頭条虫	1 (10.0%)	2 (22.2%)	3 (15.8%)
吸虫類	壺形吸虫	2 (20.0%)	2 (22.2%)	4 (21.1%)
線虫類	猫回虫	2 (20.0%)	0 (0.0%)	2 (10.5%)
	猫鉤虫	1 (10.0%)	2 (22.2%)	3 (15.8%)
陽性頭数		3 (30.0%)	4 (44.4%)	7 (36.8%)

※重複感染があるため虫卵検出数と陽性頭数の合計数とは一致しない

(3) 地域別にみた陽性率

捕獲または収容された住所地を地域別に分類し、県内各地域における寄生虫陽性率を比較した（表3）。

表3 地域別にみたイヌ、ネコの寄生虫類の陽性率

地域	イヌ		ネコ	
	検査数	陽性数 (%)	検査数	陽性数 (%)
県北部	12	3(25.0%)	12	5(41.7%)
県南部	5	0(0.0%)	0	0(0.0%)
県西部	8	1(12.5%)	6	2(33.3%)
県東部	7	1(14.3%)	1	0(0.0%)
合計	32	5(15.6%)	19	7(36.8%)

4 考察・まとめ

本調査は、エキノコックスの埼玉県への侵入に関する疫学調査の一環として実施しているが、依然として様々な寄生虫類の感染が明らかになり、ヒトに感染する動物由来感染症の原因となるものも確認された。犬回虫や猫回虫の幼虫がヒト体内を迷走する幼虫移行症や、犬鞭虫卵によるヒトの腸管への寄生例等が報告されている。また、本年3月には、厚生労働省から、愛知県知多半島の一部地域において、犬のエキノコックスが定着していると考えられる旨の情報提供があった。これらの感染予防には、ペットの糞便を適正に処理することは勿論、手洗いの励行が重要である。動物に触れた場合や、砂場や公園など動物が排泄しやすい場所で遊んだ後は特に意識して手洗いをする必要がある。

今後も寄生虫侵淫調査を継続し、ホームページやイヌ・ネコの譲渡講習会、動物愛護教室等で情報発信し、県民への動物由来感染症予防の普及、啓発に努めていきたい。